説教　**神さまの子どもたち**　2020 年 3 月 15 日 ロマ書の学び 71

ローマの信徒への手紙 8:18-22 （新共同訳聖書：新約 p284/和英聖書：新約 p371）
コリントの信徒への手紙Ⅱ・4:16-18（新共同訳:新約 p329/和英聖書:新約 p428）

アダムの

　今日はロマ書の学び第 71 回です。読んでいただいた箇所は、先週と同じ個所でローマの信徒への手紙 8:18-22 です。先週は 18 節だけを取り扱ったので今日は残りの 19-22 を取り扱います。前回、18 節での学びでは、「人には苦難があるのだ！それは、キリストを信じてクリスチャンになったとしても、苦難はあるのだ！むしろ、苦難があることは人が栄光の身体を受けるための、栄化されるための証拠なのだ！」ということを知りました。そして、今日は 22 節までをお読みしましたが、18-27 というのは 3 つの「呻き」について述べられています。今も私たちには苦難がある。その現在の苦難には３つの「呻き」があると言うのです。１つは「被造物の呻き」です。この被造物の呻きが今日扱う 8:18-22 です。2 つめが「神の子たちの呻き」です。これが 8:23-25 です。3 つめが「御霊の呻き」です。これが 8:26-27 です。この 3 つがこの 18-27 でパウロが述べているのです。今日は 1 つめの被造物の呻きについて学ぼうとしています。来週は「神の子たちの呻き」を学び、再来週は「御霊の呻き」について学びます。人には苦難がある。そこには３つの呻きがある！ということです。今日はその１つめの「被造物の呻き」です。パウロは被造物の呻きの原因について 19-20 節で述べています。では 19-20 をご一緒にお読みしましょう。「⑲被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。 ⒇被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。」19-20 にかけて、「被造物が虚無に服した」と言っているのですが、「虚無に服した」ということが「呻いている」ということです。ここでは、被造物というのは人間ではないのですが、人間であるかのように表現しています。これを「擬人法」と言いますが、この擬人法はヘブル的手法で、詩編や預言書にはよく出てくる表現方法です。例えば、詩編 98:8 に「山々よ、共に喜び歌え」とあります。皆さんは、山が喜んで歌っているところを見たことがありますか？共に喜び歌っているとすれば、それは人間ではないですか。あるいはイザヤ書 55:12「あなたたちは喜び祝いながら出で立ち／平和のうちに導かれて行く。山と丘はあなたたちを迎え／歓声をあげて喜び歌い／野の木々も、手をたたく。」皆さんは、山が「うわ～！」と歓声をあげて喜んで、木々が手を打ち鳴らすのを見たことがありますか？こういうのを擬人法（擬人的手法）と言うわけです。こういう文学的手法というのは、直接「人が歓声をあげて喜んだ！みんなも手を叩いて喜んだ！」と表現するよりも、擬人的手法を使った方が感情的なレベルでメッセージが伝わって来

るわけです。だから、パウロも感情レベルで訴えている。被造物の呻きというのは、神さまがお造りになった世界の崩壊です。神さまがお造りになった１つひとつの被造世界が崩壊しつつあるのだよ！ということを、人間に譬えて「被造物が呻いている！虚無に服した！」と表現しているのです。

罪に

　大切なことは、被造世界が自ら呻いているのではありません。要するに、呻きの原因について、20 を見ると、「被造物が虚無に服したのは自分の意志ではない。服従させた方の意志だ！」とあります。要するに、神が被造物に服従させたのです。では、神に被造物を服従させることに至った、その原因を作ったのは誰か。神の怒りを招いた責任は誰にあるのか。それはアダムです。だから、東日本大震災が起こったときに、千葉市の7 歳の女の子がローマ法王に向かって「神さまがいるのになぜこうなるのか？」とか、あるいは、クリスチャンが「どうせ神などいないのだ！」と言って、まるで神さまが悪いかのように神さまを非難することは的外れなのです。責任はアダムにあり、そしてアダムの子孫でありアダムの原罪を引き受けて相変わらず神さまに背を向けている私たちにも、その責任があるわけです。今日は開きませんが、皆さん家に帰ってから創世記 3章をご覧になってみてください。そこで神さまは、アダムに向かって「お前が原因なのだ！」と言って、アダムの罪が被造世界に影響を与えた責任について、神さまがアダムの責任を追及しています（創世記 3:17-18）。そのようにして、アダムの罪によって人は崩壊の過程を歩むようになったのです。だけど、崩壊だけではありません。ちゃんと望みがあることもパウロは語っています。さきほどお読みした 19 節です。「被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。」被造物の希望がどこにあるのかと言うと、神の子たちの現れです。そこに被造物の希望がある。つまり、アダムの罪による呪いが取り去られて、その次に、再び被造世界が栄光に変えられる時が来る。それを待ち望むことが出来るということです。それが次のセクションです。では、21 節をご一緒にお読みしましょう。「⑵1)つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。」ここに「神の子どもたち」とありますが、これは私たちのことですね。すると、ここで「神の子どもたちの栄光に輝く自由」とありますが、これは私たちの救いが完成することを意味しているわけです。つまり、救いの三要素、「義認の救い」「聖化の救い」「栄化の救い」の 3 つめの栄化の救いです。キリストを信じた私たちは救われました。過去に救いを受けました。これが 1つめの救いである義認です。そして、過去において救いを受けた私たちは今現在、救われているという現在進行形の救いを受け続けています。今は神さまの御言葉によって罪を耕して頂いている状態です。これが２つめの救いである聖化です。そして、今現在救われ続けている私たちが将来受ける救いが、未来形の救いである３つめの栄化です。栄

光の身体を受けるということです。火葬場に行って身体を焼かれても魂は、あるいは、霊は生き続ける。それをパウロはここで「神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかれる」と言っているのです。つまり栄光の身体をもった神の子たちが出現すること、これが栄化です。さらに言うならば、私たちの栄化が成就した瞬間に被造世界が回復されるのです。被造世界の回復というのは、要するに、元通りになることですから、それはアダムが罪を犯す前に彼が置かれていたエデンの園の状態に戻されるということ、それが、パウロがこの 21 節で言っている「神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかれる」と言っている内容です。キリストを信じて、今現在は神さまに罪を耕して頂きながら救われ続けている私たちは、将来パラダイスに迎えてくださるということです。これが「栄化」というテーマなのです。

生きる

最後の 22 節をご一緒にお読みしましょう。「⑵被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」ここに「被造物がすべて今日まで共に呻き」とありますが、「今日まで」というのは、これは「いつから」のことでしょうか。これは、アダムの罪以来ということです。アダムが罪を犯してから今日までです。アダムの堕落以来今に至るまで自然界は崩壊しつつあるということです。では、「共に呻き」と言っていますが、これは私たちと共に自然界が呻いているということです。つまり、今日のポイントは人間だけが呻いているのではないのです。自然界も呻いている。自然界が呻いているというのは、要するに、それは自然界が崩壊しつつあるということです。私ももう 50 年以上生きていますが、あるいは、私よりも上の年代の人もそうでしょうけど、これだけ生きて来て過去を振り返ってみたときに、「あぁ、今は自然界がどんどん良い方向に向かっているなぁ！」と感じる人はいますか。そうは感じられないですよね。クリスマスのメッセージでも環境問題に取り組むアメリカの元副大統領だったアル・ゴアさんのお話をしましたが、彼が言っているように、特にこの 20 年ぐらいを振り返って見てみると、地球の温暖化による異常気象や台風の巨大化と言われていたものが、もうこの数年ではそれが当たり前になっている。地震や災害が非常に大きくなって、その頻度が増していることも明白です。世界のあちこちでそのような災害が起こっている。私の印象では、あの阪神大震災のあたりからだいぶ変わって来たような気がしています。原発はどうでしょうか。ある程度、科学的根拠によって制御できるという前提で原発行政が進められて来たわけですが、どうでしょうか。もうあの福島の第一原発に置かれたトリチウム水も、いよいよ海に流さないと満タンになって来た！と言われています。科学的に作った危険なゴミを海に流さなければ原発は維持できない。ますます、人間は罪を犯し続けようとしていて、その責任の一端を私たちも担っているわけです。だから、あの東日本大震災を教訓にしてさらに科学的に立派に

震災に耐えるものを工夫して行くか。または、それがもう科学的にも人間の知恵を超えてしまったと素直に認めて、原発から自然エネルギーにシフトチェンジして行くのか。そのどちらかが、「アダムの罪を引き受けて生きる、そして最終的な楽園、パラダイスを目指している私たちの今の指名だ！」と私は思うのです。もはや、私たちの制御できない巨大な怪物を抱えてしまっているというのが、原発というもの本質だと思います。もはや、使用済み核燃料の処理方法も分からないまま、キケンなゴミだけを大量に将来の子どもたちにつけを回すことに対しては、「ストップ！」と声をあげ、その声を実行に移して行くことが私たちの使命です。ただ、私がここで言いたいのは、自然界はますます崩壊していくよ！ということです。でも、「希望があるのだ！」とパウロは言っています。ますます自然界が崩壊し、ますます私たちが苦しみを味わうことがあっても、それは意味のない苦しみではない！とパウロは述べているわけです。そのことを教えるためにパウロは「共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」と言っているのです。

私たちにも

パウロは「産みの苦しみ」と言っています。パウロは男ですが、彼は産みの苦しみを知っていたのでしょうか。私も知らない。だけど、こんな話を女性から聞いたことがあります。「産みの苦しみというのは、最後の瞬間はもう世界がひっくり返るぐらいの痛みである。もう、『痛い』なんて言葉では言い表せないぐらいの苦しみだ！だけど、それなら１回でヤメておけばいいのに、どうして２回、３回と続けるのかと言うと、それは苦しんだあとの喜びを知っているからだ！」と、その女性は言っていました。だから、今日の聖書の箇所は「呻き」がテーマですから、苦しいことばかりです。私もメッセージを用意しているうちに、辛くて、苦しくて、もう絶望しか無いじゃないか！と、自分でもそう思うようなメッセージです。だけど、その苦しみというのは、パウロが「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないのだ！」と言っているように、私たちがキリストを信じて希望や喜びに生きるための通過点でしかない。ちゃんと、その先には希望があるのだよ！ということを語らねばなりません。なぜならば、今の自然界の崩壊、あるいは被造物の呻きというのは、新しい世界を生み出すための苦しみだからです。だから、苦しみは前座であって、必ずその次には喜びがやって来るというのがメインイベントなのです。楽園です。パラダイスです。そこでキリストと共に暮らすことが出来る。だから、その将来の希望を先取りするために、そこに住める確証を今から受け取るために、私たちはこの苦しみの世界の中にありながら、イエス・キリストを信じる信仰によって得ておく必要がある。それが、今私たちが罪を赦してもらいながら神さまに育ててもらっているという、聖化の段階にあるということなのです。整理すると、私たちが住んでいるこの世界はアダムの堕落によって崩壊しつ

つある。その崩壊し切った先にあるのが、キリストを信じる信仰によって得られる栄化です。永遠の身体です。同時にそこで取り戻すのが、アダムが誕生した世界であるエデンの園の回復です。楽園です。パラダイスです。だから、私たちがイエス・キリストに従って生きていくというのは、一時的なことではないのです。キリスト教は世界観であり歴史観です。その世界観・歴史観の中に私たちは生きているのです。

楽園が待っている

さて、私たちはこれだけのことを聖書から教えられて来て、では、どう生きればいいのか。それは、一言で言うと「終末的視点で生きる」ということです。皆さんが、パソコンとかワープロで「終末的」と打つと、ウィークエンドという意味の「週末的」と出てくるでしょうね。だから、「週末的視点で生きる」というのは、「いつも土日のように生きる」という意味ではありませんよ。ウィークエンドではなくてエンドタイムという意味の「終末」です。「終末」と聞くと「終わりの末」ですから、恐ろしいイメージがありますね。でも違いますよ。終末的視点をもって生きるということは、それは、具体的にはどういう意味かと言うと、地上での生活は一時的なものということです。これを分かりやすく述べているパウロ言葉が、今日ご一緒にお読みした併行記事のコリントの信徒への手紙（2）4:16-18 です。ここも、今日のロマ書の学びには欠かせない箇所なのでご一緒にお読みしましょう。きっとズッシリと来る箇所です。コリントの信徒への手紙（2）4:16-18 です。「⒃だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。⒄わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。⒅わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」どうですか？ズッシリ来ましたか？ここで言われている「外なる人」というのは私たちの肉体のことです。肉体の衰えです。肉体の衰えを皆さんは感じてますか？私が大学生ぐらいの時には、もし飛行機が墜落して海に投げ出されたら、岸が見えるまで泳ぎ続ければ助かるハズだ！と真剣に思っていましたよ。でも今では、小諸駅から歩いて教会に来るまで、とくに喘息をもっているので恐らく 2-3 回は休まないとたどり着けませんよ。あるいは、超ゆっくり歩くか。だから、私も肉体の衰えを感じています。でも、肉体が衰えても「内なる人は日々新たにされる」というのは、どういうことでしょうか。それは、もう分かりますよね。それは、外なる肉体は衰える一方であったとしても、キリストに繋がって生きている私たちは、今は神さまに耕してもらっている段階ですから、内側にある魂や霊は常に新しくされているのだ！ということです。嬉しいですね。でも、これは将来に希望が無かったらとすれば、いくらクリスチャンであってもこういう状態にならないのです。もし、クリスチャンで歳を重ねて、肉体もボロボロに衰えて、肉体

だけではなくて内側もボロボロで、家族にも「ガンコジジィ！」なんて言われてしまっている人がいたら、教えてあげましょうね。将来には希望があるんだよ！キリストに繋がって、キリストの言葉に聞き従って、罪ある心を耕してもらっている私たちには、希望があるのだよ！故に、地上での生活というのは一時的なものなのだよ！と。その先に、質的に異なった世界が実現してくることを、聖書は約束してくれているのです。それは今の私たちには想像できないことなのです。たとえば、卵の中でふ化寸前の雛に向かって、「もう、あなたは殻を破って出るよ！あとちょっとでパラダイスだよ！」と言っても分からない。あの卵の中のあの空間が雛にとっての空間なのです。雛はその空間の中で、「自分はここが気持ちいい！ここが心地いい！ここから出たくない！」と思っているわけです。殻の中で雛の生活が完結しているわけです。でも、実際にはそれは一時的なものであって、殻が破れて外に出た時に彼はホントの意味で生きるべき道を歩み始めるわけです。要するに、卵の中の生活というのはホントに一時的なものなのです、雛の場合は。それは、そのまま私たちの生き方にも当てはまるのです。今の私たちの地上の生活は一時的なものである。富であれ、苦難であれ、成功であれ、失敗であれ、私たちが地上のものだけに目を注いで生きるならば、その目を注いでいるものによって束縛されます。でも、それは一時的なものであって、私たちの国籍はキリストと共に暮らす天の国にあるのです。それ故、キリスト教は世界観であり、そして歴史観なのです。このようなとてつもない真理を、聖書を通して教えられていることは何と幸いな事でしょうか。この幸せの中に生きていくことが、私たち神さまの子どもとしての歩みなのです。